

【紀行文】

シベリアの風 今（2008年8月）

荻野源吾（広島文教女子大学特任教授）

The state of these days of the Siberia

Gengo Ogino

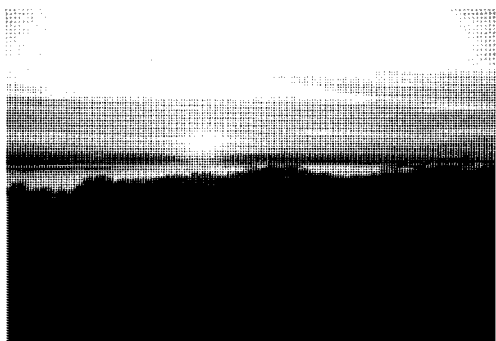
Key Word：シベリア・イワノフカ慰霊・シベリア出兵・シベリア抑留・日露友好

少ない情報の中から

私たちにとって「シベリア」という土地に馴染があるとはいえません。極端に少ないと思われれます。私自身も今回の旅に参加しなかったら、この土地へのイメージは湧かずほとんど白紙に近いものでした。ただかなり広大でかつ手づかずの自然の大地が広がっていることのみが頭に浮かぶ程度です。今日でもシベリアの旅情報はそんなに多くはありません。ネット情報以外で街の書店で手に入るのは、「地球の歩き方」のロシア、シベリア編と地図、それもあまり詳しいものではなく、そして唯一、コリン・サブロン著「シベリアの旅」（共同通信社）が今回事前に読んだ本で役に立ったといえます。今回「日露友好親善の旅」で体験したことを中心に最近のシベリアの様子を報告したいと思います^(注1)。

ハバロフスクにて

日本人にとって「ハバロフスク」という地名



アムール川の夕陽

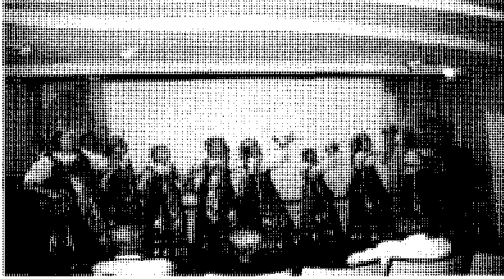
は日常に天気予報の地名によくでてくるので、極東ではウラジオストク（ウラディヴォストーク）に次いでまだしも馴染みのある地名ですが、みなさんは一体どんなところだと思いますか。

人口65万人が周囲45Khm²に暮らしています。高層ビルや平均4～5階建てのアパート群が緑豊かな街路樹に囲まれて建つこざっぱりとした街です。市内にトロリーバスが走っていました。ご他聞にもれず日本の中古車が大活躍です。中には「〇〇商事」と日本語が残されたまま走っているのは東南アジアと同じ風景です^(注2)。

八月のこの地はかなり暑くみんな半袖で買い物や散歩をしています。自転車とバイクは意外に少なく住民はみんなゆったり歩いています。冬場に凍結するからでしょうか。ここが今回の日露友好の旅の最初の訪問地でした。私たちはソウル経由でハバロフスクに入り、復路はここから新潟への直行便ダリア航空（約2時間の時差があり、13:30ハバロフスク発、13:30新潟着でした）で帰ってきました。

ここでは平和慰霊公苑、日本人墓地の墓参を中心にハバロフスク平和基金と国立極東博物館ほか市内の見学に行きました。また地元少女合唱団の歓迎を受け、かわいらしいロシアの少女たちのその表情のすばらしいアンサンブルに大変感動しました。着いた日のホテルからは数キロの川幅の雄大なアムール川の対岸に沈む大きな夕陽と、翌朝川の傍を散歩したとき、家や事務所の前の道路や公園のいたるところで箒（ほ

うき)を持って掃除する人が多くみかれられ、この二つのことが強く私のこころに残りました。その箒は箒草を丸く束ねて片手で掃ける30cmのものでした。(この人たちははたしてボランティアか有償の掃除人かは聞き漏らしましたが)



ハバロフスク子ども民謡アンサンブル「ムラダ」の歓迎ミニコンサート

なお宿泊した「ホテルインツーリスト」は、以前はソビエト時代から各地に公設のものとして運営されてきたものが、現在は民営化された旅行社兼ホテルになっているということです。

そして全行程をロシア国際平和基金の皆さんにご案内いただきました。

ブラゴヴェシチェンスクにて

この地名は何回発音しても難しい。まさにロシア語的表音であると言えます。ブラゴヴェシチェンスクともあります。ソウルからの機上ハバロフスクに帰宅する専門学校生と一緒にりましたが、彼もこの地名についてはニエツトということでした? しかしこの地に足を踏み入れてみて実感したことです。アムール州の州都(今年の9月、州創立50周年記念を迎えるとのこと)として栄え、ハバロフスクと同様の近代的な街として整備されており、この付近の大きな都市ではハバロフスクの隣町といえます。なのに数百キロ離れてしまうとこの隣町の地名すらよく認知されにくい、それほどシベリア・ロシアの大地は広いという感覚になります^(注3)。

今数百キロと書きましたが、もちろんこの地にたどり着くにはかの有名な「シベリア鉄道」

(一等寝台、二人乗り)に乗って丁度一晩かけての里程です。シベリア鉄道は何かと郷愁を誘う重厚長大な列車です。まずプラットホームと車両の乗車口の位置までの高さに驚かされます。バリアフリーがどうのとの比ではありませんね。一車両ごとに車掌さん(たいがい女性)が居て、チャイとかコーヒーとか何かと世話になります。こうしてやっとたどり着いたという想いのブラゴですが、この間車中からの眺めは、十メートル前後の瀬の高い白樺林の防風林、タイガの低い草地、湿地帯が延々と続きます。

市街にはところどころにウォッカの壺や紙くずの散らかしもありますが、概して清潔です。広い道路や並木道、そして市民のアパート・マンションや会社のビルなどの建物の新旧が混在しながらも、落ち着いた佇まいでありました。

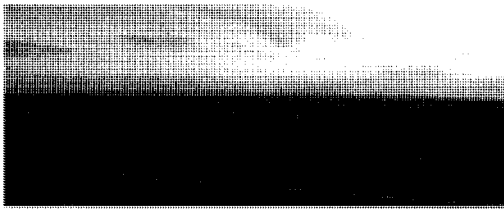
ついでながら冬はマイナス40度にもなる厳寒の地に育つ樹木とは、カラガチ(ニレ)、トウポリ(ポプラ)、ベリオザン(白樺)、イェリ(ヒマラヤスギ)、サスナ(松)などであります。

その後同じ州にあるイワノフカという村に建っている「白露共同追悼碑」(懺悔の碑)を慰霊しましたが、パトカー先導付きでウス村長さんの出迎えを受け一同感激したものです。また村にある接待所ともいべき「天国の島」レストランでは素朴な作りたてのトウガラシ、ピーマンそして保存食のピクルスなどをつまみに、暖かいボルシチをいただきつつ、何回もウォッカでの白露相互の歓待が繰り返されました。とくにピクルスが「フクスナ(おいしい)」と好評でした。

ノヴォアレクサンドロフカとスパボードノエの二つの地域

旅の4日目以降6日目まではロシア・アムール州周辺の南の地域と北方面へとまた数百キロの距離をバスで移動をしました。途中休憩でのトタン葺きの小さな便所はとても使えたものでなく、仕方なく大地にむかっておおらかに放尿(失礼)。アムール州はロシアの穀倉地帯といわ

れるだけあって、見渡す限り地平線の彼方まで続く大豆畑にはびっくりしました。その土地では消費せず、その大豆をイルクーツクに集めているようです。この間両地域で4箇所の墓参と慰霊。そのほか小学校や保育所の訪問、民族資料館などの見学やアムール州鉄道大学とその大学内に置かれている日露協会資料館などを視察することが出来ました。大変盛り沢山で内容の濃い旅に感謝でした。特にこの中でも、保育所は突然の訪問にも関わらず所長さんがにこやかに応対して下さり、きれいに整頓された保育室を案内、自然の佇まいの中、ゆったりのにびり砂場で遊ぶ子供の笑顔が印象的でした。一方民族資料館の前庭に無造作に置かれていた数台の戦車には驚かされました。



広大な広がりを見せる（視界360度の）穀倉地帯
アムールの大地

地元のロシアの人たちの暖かく、素朴な人柄とそのおもてなしに心が温まりました^(注4)。

私の今回の旅の目的の一つは、シベリア捕虜として収容所（一般に「ラーゲリ」と呼ばれています、ただしこの言葉は単に収容所だけの意味ではないそうです）に入れられ、その後戦病死した義父の眠る土地への戦後63年経っての遺族としての墓参でした^(注5)。

同時にその昔日本軍の「シベリア出兵」によるロシア革命への干渉軍として、日本がロシアへの蛮行を働いた過去の歴史があることを改めて思い知らされました。

双方が被害者であり加害者でもあるという歴史を繰り返していることに人間の愚かさを痛感させられました。

シベリア出兵（イワノフカ村での焼き討ち）とシベリア抑留

先にあげたイワノフカ（イヴァノフカ）での村人への虐殺に似た行為が今回墓参した広いアムール州でも起きた事実があるようです。「1918年秋、州都ブラゴヴェシチェンスク＜武市＞、アムール鉄道沿線と要地ゼーヤなどを占領した日本軍は、引き続き、アムール州内各地で過激派残党の討伐作戦を展開した」^(注6)。「これらのうち最も大規模でかつ残酷な被害を被ったものとして知られるのがイヴァノフカである」^(注7)。「『其の住民中男子ハ殆ント赤衛軍ニ参加』したとの理由を挙げて焼き討ちを正当化した日本軍はイヴァノフカを目の仇にしていたのである」。「一歳半の女兒を含む291人」という数字がイヴァノフカの焼き討ちの犠牲者として記載されています^(注8)。

教科書でも十分に教えていない隠された歴史がいたるところにあることを私たちは知らなければなりません。

今から90年もまえ、はるか日本から出兵して、荒涼とした広大な大地の一つのつましい村々に荒々しい掃討を展開しつつ侵攻した当時の陸軍の行軍に思いをはせた時、なんとすごい行軍であったことか。現在においても、旅してかなり困難な旅程からみても当時の移動は驚きの行程でもあります。こうした印象が頭をよぎるのが実際に現地に旅してみても実感です。

シベリア出兵は1918-1925年にかけて^(注9)「革命軍によって囚われたチェコ軍団の救出」という連合国軍の大儀名分でロシア革命への干渉戦争（Siberian Intervention）であった。日本は約7万余の兵力、戦死者5千人といわれています。

一方シベリア抑留は、第二次世界大戦末期（1945/8-9～1956）にソビエト（中国東北・内モンゴル自治区東部含む）に57～65万人が抑留されました。厳寒の中強制労働に使役され、抑留者全体のほぼ一割、約6万人が死亡したといわれています^(注10)。

戦後50年経って、イワノフカ村を墓参に訪れ

ていた当時の全国抑留者補償協議会会長斎藤六郎氏は日本軍の残虐行為を知るに及んで、双方の和解と懺悔をこめ、戦争と対立の時代から、平和友好を願って、この地に「懺悔の碑」を建

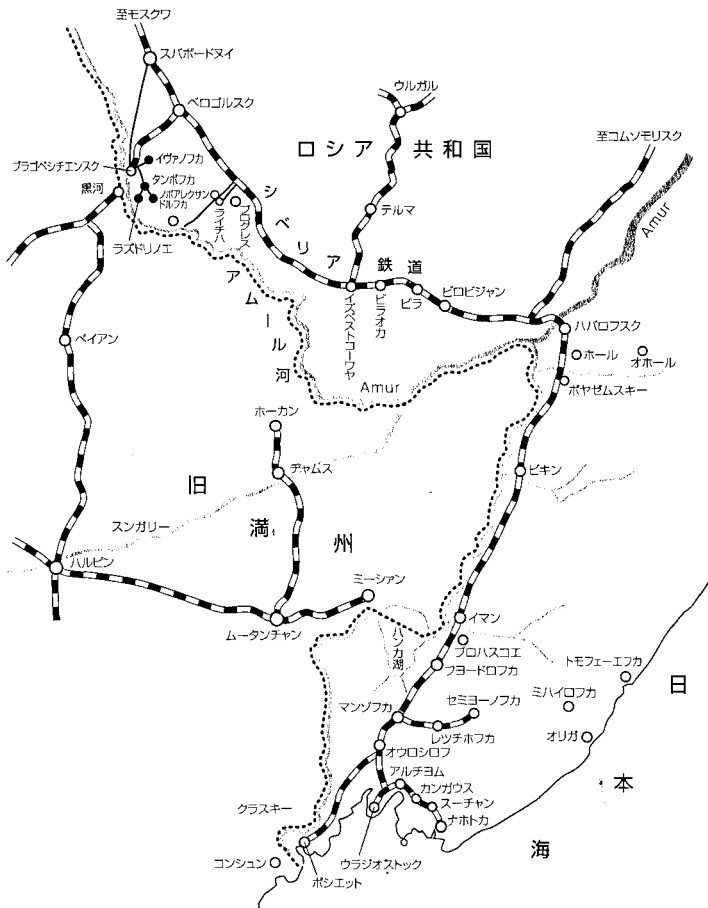
てられたということです^(注11)。

したがってこの碑は、今日では日露友好を目指す、ロシアでの唯一の記念すべきモニュメントとなっているというのが歴史的経過なのです。



イワノフカ懺悔の碑と地元の子どもアンサンブル「そばかす」の歓迎

ハバロフスク・アムール州主要図



今回のシベリア・極東の旅を終えて感じたことなど

厳密にはシベリアとはウラル以東、ロシア・シベリの広大な領土は、アムール州、沿海州、ロシア極東などの地方にまたがっています。

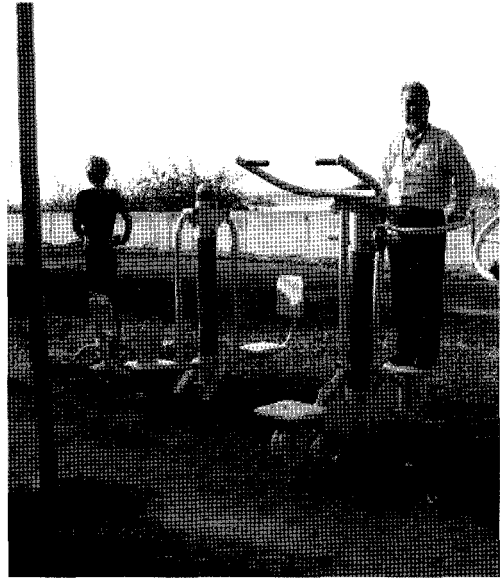
歴史とか文化は一方的に見るものではないことは当然ながら、今回の旅を通じて、普段は何かと周りに合わせるというか、迎合しがちで、一方的な判断を下すことが多いことを改めて考える機会となりました。

シベリア出兵と第二次大戦後のシベリア捕虜の関係もその一つです。

これらを歴史という長い時間の流れの中から見た時わずか一世紀にも満たない間にも猛烈なエネルギーを浪費しつつ、想像を絶するスクラップを積み重ねている事実、人間の宿業ともいえる行為に驚嘆させられます。

歴史の皮を一枚むけば、ロシアの虐待を受けた人々と日本人の捕虜たちの生活が重なってくる。この土地で無念の死を遂げた人たち、無残に殺されていった当時人たちの思いは如何なものであったのでしょうか。現在この同じ地は、今も決して近代化されたという感じの村ではありません。当時の面影を残しているともみられる古風な佇まい。でも近代化とは一体何なのでしょう。

各戸の農家が300～600㎡の広さの菜園を持ち、ごく無造作な木造のトタン屋根に住み、牛馬の肥やしでの自然の農法でゆっくり暮らしている様は、仮に時代が日本より数十年の近代化の開きがあるように見えても、その質素で剛直な生き方は今の日本の都市のアパート生活に比して憧れに近いものがあると思えます。またこんな生活スタイルの中にこそ豊かな贈り物が隠されているともいえます。いわばシンプルライフです。日本のように飽食で、あふれる物に囲まれてきたからこそ見えてくる生活スタイルかもしれません。「文化」という価値からみたととき、こうした面から眺めることが一方で必要であり大切になってくるとも思われます。



街路の運動器具

また今回の旅の中、たとえば小さなことです。ブラゴの街を散歩してみて、道路の傍の空地に、頑丈ないろいろ工夫してある運動器具があちこちに設置してあるのを見て、これは日本ではまだ十分でない「ちょっとした街角リハビリ用具」だと新たな学びになりました。機械の面白さだけでなく、多分日本ではいろいろな規制が働いてこういう場面は機能しない社会になってしまっているのではと反省させられます。また国単位でみれば広大な面積を誇る国、狭い国に住む人たち、そのどちらに住んでいても、いさかいあう人間の存在に気づかされます。こうした国および歴史を時には肌で感じる旅が海外への旅であり、今回私の鈍った頭と身体を適当に刺激してくれました。

そして旅の中での「非日常を通じての学び」は大切であります。世界平和を求める心は、はかならずしもイデオロギーでの反戦とか原爆の悲惨さを学ぶこと、単に戦病死者への弔いをするということのみではありません。この「非日常のいきつくところの人間の死」を「旅などの体験を通じてたえず繰り返し日常の中に非日常を意識する」こころの中から平和の大切さがお

のずと自覚されるものと思っています。そういう意味で今回は単に墓参という以上に、旅に味あう非日常の中から、普段毎日の生活であまりに平凡で、意識していないといえる「あたりまえの生活」がどこの国、地域でも続けられることの幸せを実感する旅となりました。私たちの大学の人間福祉学科では、「普通に暮らせる幸せ」を追求するという意味で、その頭文字から「ふくし」と言っています。

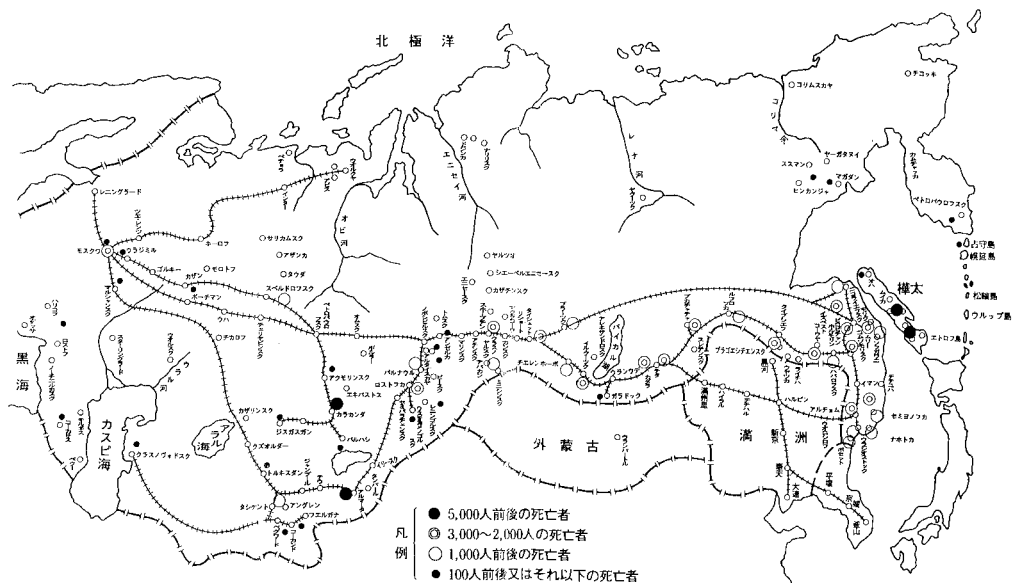
シベリアでは春は遅く、まだ曠野の凍土に吹きさす風の厳しい時期かと思われます。しかしシベリアに吹く風も日本の山野に吹く風も、自然の息吹を感じさせる風にかわりありません

でした。安心して、ほっとして旅の疲れを癒しながら、こころにシベリアの大地に吹く風を満たしました。

今回の旅の主催者 NPO 法人「ロシアとの友好・親善をすすめる会」に感謝しつつ、日露の国民の末長い友好を祈ります。墓参に限らず、ロシアを訪ねたい、シベリア鉄道にも乗りたいと思いながら、今まで機会のなかった方々、多くの皆さんが次回には是非この旅に参加されることをお勧めします。「Мира и дружбы (平和と友好) !」「ザ ミール イ ドルジェブル」^(注12)。

参考資料

ソ連・外蒙古各地点死亡者発生状況概見図



出典：シベリア日本人墓地（横山墓参団 2006年報告集）より

注

- 注1 本文は2008年8月24日～8月29日に「NPO 法人ロシアとの友好・親善をすすめる会」が主催した「2008年度イワノフカ慰霊・ハバロフスク・アムール州墓参りと友好の旅」の紀行文です。
- 注2 2008年12月10日付のTVニュースで、ロシアでは白国の自動車生産を保護するため、今まで25%であった中古車の輸入にかかる関税を30%へアップするというニュースが流れ、ハバロフスク市内では打撃を受ける輸入業者のデモがあったと報道されていました。
- 注3 明治10年代、当時駐露全権公使として「樺太千島交換条約」締結後、シベリア経由で帰国した榎本武揚の日記には「ブラゴウェスチェスク府よりアムールは川幅はなほだ広くなり、本日も朝より日没まで経過せし滞筋は、我が二、三里に到る処はなほだ多し」、「六ルーブルーフラコウェスチェンスク鎮台府駈者へ」などの記述が認められます。榎本武明、シベリア日記、講談社編、2008、P.179
- 注4 大前研一、ロシア・ショック、講談社、2008には「無条件に日本が好きなロシア人」という指摘をなしており、シベリアの観光開発の将来への期待が示唆されています。（P.100 P.229）
- 注5 今回この会の旅に参加するキッカケとなったことの一つに「村山常雄編・著、シベリアに逝きし人々を刻す、プロスパー企画、2007」の著者である村山氏からこの団体の紹介を受けたことにはじまります。シベリア抑留の関係者は、名

簿がデータベース化された詳細な記録のこの村山氏の労作で確認されることをお勧めいたします。

- 注6 原暉之、シベリア出兵、筑摩書房、1989、P.470（NPO 法人ロシアとの友好・親善をすすめる会 常務理事高橋満治氏による資料提供）
- 注7 同上 P.475
- 注8 同上 P.476
- 注9 原氏による日本軍の干渉事跡としてはより厳密には1917-1922とされています。
- 注10 <http://ja.wikipedia.org/wiki/>
- 注11 シベリア日本人墓地一日露平和友好の原点を尋ねて、横山周導平成18年度ハバロフスクとアムール州墓参団、平成18年10月20日 P.1 なお横山周導師はNPO 法人「ロシアとの友好・親善を進める会」の理事長であり、過去13回に渡りシベリアへの献身的な墓参を続けてこられています。
- 注12 本文は「NPO 法人ロシアとの友好・親善をすすめる会」<http://www.wa.commufa.jp/~nichiro/shuisho.html>の2008年度訪露報告書に報告した内容に加筆修正を加えたものであることとお断りしておきます。

追記 なお、この紀行文に関連する記事として、この旅に同行された共同通信社記者（松島芳彦編集委員）及び写真家山公雅氏による記事「歩み来て、未来へ（ニッポン近代考）—シベリア出兵と抑留、『炎の記憶』乗り越え慰霊」が、信濃毎日新聞はじめ秋田さきがけ、京都新聞等全国25誌に掲載された（2009.1.）。

